電話のコール音。

受話器を取る御門智也（２８）。

智也「はい。和歌山観光協会、担当は御門が承りました。……（ため息）また出ましたか。わかりました。すぐに行きます」

加太港。

鳴り止まぬ、セミの声。

紀淡海峡の波が、港に当たる音が響く。

そこに船の汽笛の音がする。

田中耕三（５８）が船から出てくる。

耕三「おーい！　御門君、こっちだ！」

智也が走って来る。

智也「耕三さん。あいつらは？」

耕三「儂らが気づいた時には、もう忍者のごとくいなくなっていたよ。で、これがいつもの紙だ。有志会って書かれてるから、あいつらの仕業なのは間違いないな」

智也「……今日は、どんなことをやられたんですか？」

耕三「船がトラブルを起こして休航になった
と、デマを流された」
智也「……それはまた、地味で姑息な嫌がら
せですね」
耕三「だが効果的だ。時間通りに出発しない
ことで帰る客も出たし、こっちは券を買っ
た客の為に臨時船を出さにゃならん」
智也「ネットでも、変な情報を流されてます
からね。島に幽霊が出るだの、行方不明者
が出るだの」
耕三「まったく、困ったもんだよ。せっかく、
テレビで宣伝されて、人気のスポットにな
ったってのによぉ」
智也「宣伝というより、アニメの世界観に似
てるってことで、人気が出たんですけどね」
耕三「海外でも人気らしいな。客の中に、結
構外人も見るぞ」
智也「そこまでなんですか？」
耕三「この人気は保っていきたいところだよ。
なのに、目に見えて客足が減ってる。早く

何とかしねえと、ヤバいぞ」

智也「……そうなんですけどね。実際、何をすればいいのか、さっぱりで」

耕三「おいおい。なんだよ。頼りねえなあ」

智也（N）「友ヶ島。和歌山県和歌山市加太の紀淡海峡に浮かぶ無人島。第二次世界大戦時に、軍事要塞として利用されていた。２０１５年１１月に友ヶ島灯台が国の登録有形文化財に指定されたことと、人気アニメ映画の世界観に似ているということで話題になり、一気に人気観光地へと上り詰めたのだった」

和歌山観光協会事務所。

智也がため息をつきながら、席に座る。

それを見て小林和弘（４１）が苦笑する。

和弘「御門。大変そうだな」

智也「課長。そう思うなら、少しは手伝って下さいよ」

和弘「忙しいから無理だ。代わりに優秀な部下を付けてやっただろ」
智也「優秀……？　課長の中での優秀というのは、人の足を引っ張る人材のことを言うんですか？」
　星野美香（１９）が部屋に入って来る。
美香「いやー。ホント暑いですねー。もう夕方なのに、ぜんっぜん気温下がらないです」
智也「……星野。今まで何してた？　ヨモギ餅屋との打ち合わせに、四時間もかからないよな？」
　美香が智也の隣の、自席に座る。
美香「それがですね、智っちさん！　聞いてくださいよ！」
智也「俺のことは御門さんと呼べって言ってるだろ」
美香「あ、私、そういう礼節とか、気にしないんで」
智也「俺が気にするんだよ！　……で？」
美香「そうそう！　虎の屋に寄ったらですね、

集めている同人作家の本が入荷してたんですよ！　こりゃラッキーと思って、レジに持ってった時に、私はふと気づいたんです。もしかしたら、最新刊も入荷しているのではないかと」

智也「ちょっと待て。なんで、普通に本屋に行ってるんだよ」

美香「え？　帰り道だったので」

智也「……」

美香「案の定、新刊を隠し持っていたわけですよ。でも、あまり数は入荷してなくて、予約した人にしか売れないって言うんで、さっきまで交渉してたんです」

智也「業務中に、私用の買い物をしていたと？」

美香「（笑顔で）おかげで、買えました！」

智也「……ヨモギ餅屋との打ち合わせはどうなったんだ？」

美香「智っちさんじゃないと話にならないって、開始三十分で帰っちゃいました」

智也「というわけで課長、すぐに人員を入れ

替えてください」

和弘「えーっと、確か、星野くん、英語が話せるそうだぞ。すごいじゃないか」

智也「うちじゃ、特に必要ないです」

和弘「（小声で）……彼女は、代議士の姪っ子なんだよ。使えないからって、追い出すわけにはいかないだろ」

智也「どうして、そのしわ寄せが自分の方に来るんですか」

和弘「まあ、これも経験だと思って」

智也「（ため息）星野。明日、友ヶ島に見回りに行くぞ。準備しておけ」

美香「ええー。肌が焼けるから嫌です。それにどうせ、行っても無駄ですよ。捕まりっこないです」

智也「うるさい。とにかく明日、加太港に十時に集合な」

美香「うわー。部下が行きたくないって言ってるのにー。パワハラだ。訴えてやるー」

智也「……逆ハラだ」

和弘「御門。有志会、捕まえるなら、現行犯で、だからな。常にビデオ、回しておけよ」

智也「……課長も来ますか？　責任者として、一度くらいは視察しておかないとまずいと思いますけど」

和弘「はっはっは。頑張れよ。検討を祈る」

智也「……」

智也（N）「数か月前から、現れた有志会。それは友ヶ島に来る観光客にほぼ毎日、嫌がらせをするという団体……というより、サークルに近い集団だ。人数や活動理由などは一切つかめていない。最初はただの悪戯とタカをくくっていたが、客足に影響が出始めると、ようやく市議は重い腰を上げた。そして、俺たちに対処するようにと、お達しを出してきたのだった」

友ヶ島内の森を歩く、智也と美香。

セミの鳴き声と、木々が風で揺れる音が

響いている。

美香「なるほど。なかなか、良い所ですね」

智也「星野は、友ヶ島、初めてなのか？」

美香「こういう観光名所って、ジモティはあまり来ないもんですからね」

智也「確かにな。いつでも行けるって思うと、いつでもいいやってなって、結局行かないことが多いからな」

美香「智っちさんは、仕事以外で観光地とかに行ったりするんですか？」

智也「いや、しない。観光協会に内定が決まって、引っ越しもギリギリだったし、仕事始まってからは課長から無茶振りされて、休日はないようなもんだったからな」

美香「うわー。社畜ですね。キモイです」

智也「ねぎらいの言葉の一つでも言えんのか」

そのとき、虫がブーンと飛ぶ音がする。

美香「うーん。虫が多いですね。虫よけしてるんだけどなあ」

美香がポケットから虫よけスプレーを出

して、腕に吹き付ける。
智也「それ、普通の虫よけじゃないのか？」
美香「え？　虫よけに上級とか下級ってあるんですか？」
智也「いや、そうじゃなくて、この辺、ブヨも出るんだぞ」
美香「ブヨ？」
智也「お前、本当に地元民か？　ブヨっていうのは、パッと見、小さいハエみたいな感じなんだけど、刺されると腫れたり、熱が出たりするんだぞ」
美香「うわっ！　何それ、怖い」
智也「ブヨには普通の虫よけが効かないからな。ほら、これ吹き付けておけ」
智也がポケットから、スプレーを出す。
美香「どうもです」
美香が自分の周りにスプレーをする。
美香「……あれ？　臭くないです？」
智也「ん？　無香料のはずだぞ？」
美香「いや、そうじゃなくて、何か腐った系

の臭いです」
智也がクンクンと臭いをかぐ。
智也「うっ！　本当だ。なんだこれ。……こっちからか？」
智也と美香が森の奥へ入っていく。
草をより分けながら、進む。
すると虫が集っている場所に行きつく。
智也「なんだこりゃ！　ゴミが放置されてる」
美香「今日、ゴミの日なんじゃないですか？」
智也「いや、明らかに散らかってるだろ。それに友ヶ島は無人島だからゴミ収集車なんて来ないはずだぞ」
そこへ青木恭平（２３）がやってくる。
恭平「観光客ですよ」
智也「え？」
恭平がゴミを袋に入れ始める。
恭平「観光客がこうやって、ゴミを持ち帰らずにそのまま放置していくんです」
智也「君は？」
恭平「ボランティアですよ。僕たちがゴミ掃

除をしないと、この素晴らしい島がドンドン汚れていきます。市や観光協会も、見て見ぬフリですからね」

智也「……耳が痛いな」

美香「ボランティアって、何人ぐらいいるんですか？」

恭平「え？　あ、えっと、まだ四人なんです。今、メンバーを募ってるんですが、なかなか賛同者がいなくて」

美香「へー。こんな広い島を四人で？　すごいですねー。偉いです」

恭平「……ありがとうございます」

智也「ほら、星野、行くぞ」

美香「え？　でも……」

智也「いいから。じゃあ、頑張ってください」

智也が美香を連れて、歩き出す。

美香「いいんですか？　手伝わなくて」

智也「ゴミを片付ける用意をしてきてない。それに今日来たのは、有志会のメンバーを探すためだ」

美香「なるほど。まさに見て見ぬフリですね」
智也「うるさいな」
智也と美香が元来た道を戻る。
美香「それにしても、なんだかなーって感じですね」
智也「何がだ？」
美香「観光地になるってことは、ああやって、汚されるってことなんですね」
智也「まあ、それはどこの観光地も抱えている問題だろうな。人が集まれば、どうしてもマナーの悪い人間が出てくるもんだろ」
美香「だからって、なんの対策も打たないっていうものも、どうかと思うんですけど」
智也「綺麗事だな。人間なんて、隣の芝生が青ければ羨ましがるけど、汚かったら気にしないだけだし」
美香「自分の芝が汚れてなければ、良いということですか？」
智也「自治体はお金が入って来るのは大歓迎だけど、出ていくのは渋るからな」

美香「清掃業者はお金がかかるから嫌だって
ことですか」
智也「一応、このことは報告であげておくさ」
美香「うわー。お役所仕事ですね」
智也「まあな。ほら、行くぞ」

智也（Ｎ）「結局、この日は有志会のメンバー
を見つけることはできかなかった。そもそ
も、俺たちは有志会のメンバーの名前はお
ろか、顔すら知らないのだ。見回るだけで、
見つけられるわけがない……」

会議室。
智也とヨモギ餅店の店主（５６）が会議
をしている。
智也「場所は加太港の船着き場付近がいいと
思います。狙いは観光客に絞りましょう」
店主「しかしねえ、智也くん。急に店を出し
ましょうと言われても、資金が……」
智也「別にお店を建てる必要はありません。

出店のような屋台タイプで大丈夫です」
店主「屋台か……。なるほどなあ……」
智也「実際、友ヶ島の人気はいつまで続くかわかりませんからね。あまり費用をかけるのはリスクが高いです」
店主「しかしねえ……。屋台だと、あまり数が置けないんじゃないかい？」
智也「本店のように、土産のセットではなく、バラで売るんです。その場で食べてもらう、もしくは島に行ってから食べるように」
店主「なるほど。それなら、スペースはそれほど必要ないな」
智也「バラで売るので、少し単価を上げましょう。観光客は雰囲気で物を買うので、多少高くても気にしないことが多いです」
店主「うん。……確かに」
智也「あとは『和歌山名物よもぎ餅』という旗を用意してください。和歌山名物と付けた方が、食いつきがいいですから」
店主「いやあ、やっぱり智也くんだと話が早

い。じゃあ、さっそく、屋台と旗の方を手配してみるよ」

智也「よろしくお願いします」

店主「なあ、智也くん。観光協会を辞めて、うちの商店街のアドバイザーにならないかい？　君のおかげで、随分と街の景気も良くなったよ」

智也「はは。友ヶ島のおかげですよ」

店主「友ヶ島かあ……。なんで、あんな島が人気になったのかわからないが、本当に助かってるよ。街に活気が出てきた」

智也「……こういうブームはいつ過ぎるかわかりません。人気がなくなると、一気に客は減りますから、その辺の対策が必要です」

店主「あまり考えたくないな。できれば、ずっとこの景気は続いて欲しいところだよ」

智也「……」

観光協会事務所。

智也が部屋に入って来る。

智也「戻りましたー」

智也が自席まで歩く。

隣の席では、美香がマウスの操作とキーボードを叩いている。

智也「あれ？　課長は？」

美香「外出中です」

智也「外出？　なんの用事？　戻りはいつ？」

美香「（パソコンに夢中で）さあ……」

智也「……聞いておけよ」

智也が椅子に座る。

智也「……で？　何してんだ？」

美香「ネットサーフィンです」

智也「お前、すげえな……」

美香「何がです？」

智也「よく、仕事中に堂々とネットやれるな」

美香「そう言われると照れちゃいますね。……でも、こんなの普通ですよ」

智也「褒めてねえし、普通でもねえよ」

美香がマウスを操作する。

美香「あっ！　ビンゴかも」

智也「俺、一応、嫌味を言ったんだからさ、ネットするの止めたらどうだ？」
美香「そんなことより、これ見てください」
智也「……そんなこと？」
美香「有志会の手がかり発見したかもです」
智也がガタンと音を立てて立ち上がる。
智也「本当か！？」
美香「このサイト見てください。ボランティア募集の板なんですけど……」
智也「……友ヶ島の魅力について語り合いましょう。詳しくは下記のアドレスにメールをください。……これがどうかしたのか？」
美香「まず、詳細を載せないっておかしいと思うんですよね。だって、隠す必要、なくないですか？」
智也「……まあ、言われてみれば」
美香「本文もなんか変です。普通、ボランティア募集で、島の魅力について語り合おうなんて書きます？」
智也「まさか、お前の口から普通って言葉を

聞くとは思わなかったな」
美香「一番おかしいのはですね、他にあるんですよ、ボランティア団体」
智也「確かに怪しいけど、これだけで有志会って当たりをつけるのもなぁ……」
美香「でも、他に手がかりがないなら、駄目元で調べてみるべきだと思うんですけど」
智也「うっ！　お前はなんで、その鋭さを普段の仕事に生かさないんだよ」
美香「今、まさに生かしたとこですが」
智也「まあ、そうなんだけど……。じゃあ、島に行って、あのボランティアの人に話を聞いてみるか」
美香「頑張ってきてください」
智也「……お前も一緒に行くんだよ！」
美香「ええー。私はここまで調べたからいいじゃないですかー。十分、仕事しました」
智也「うるさい！　いいから、来い！」

加太港の船着き場。

智也と美香が並んで歩いている。
美香「うう……暑いです。早く、夏、終わって欲しいですね」
智也「始まったばかりだぞ」
耕三が船から出てきて、声をかけてくる。
耕三「おう！　御門君。この時間に港に来るなんて珍しいな。また有志会の件か？」
智也「ええ、まあ……」
耕三「そういえば、ヨモギ餅屋、この辺に店を出すんだって？　さっきまで、下見に来てたよ」
智也「随分と、張り切ってるみたいですね」
耕三「景気のいい話はな、気が急いちまうもんよ。御門君も気合い入るんじゃないか？」
美香「いやー。興味ないですね」
智也「立場上、お前がその台詞を言うのはマズイだろ……」
耕三「あ、そうだ！　景気がいいと言えば、街に新しい公民館が建つって話だな」
智也「そうなんですか？　そんな情報は、う

ちには入ってきてませんけど……」
耕三「観光名所じゃないからな。でも、ようやく街も景気が良くなって、活気付いてきたってことだ。ホント、友ヶ島様様だよ」
智也「そのためにも、有志会を何とかしないといけないですね」
耕三「そうだな。期待してるぞ！」

友ヶ島の森の中
智也と美香が歩いている。
美香「確か、この辺ですよね。この前、あのボランティアの人がいたところは」
智也「……異臭はもう、消えてるな」
美香が奥に走り、智也がついていく。
美香「うわあ。綺麗になってる」
智也「結構、時間かかっただろうな」
そのとき、乾いた破裂音がする。
女の声「きゃあっ！」
智也「悲鳴！？　行くぞ！」
智也と美香は音がした方向へと走る。

智也「どうしました！？」
智也たちが駆け付けると、そこには十代後半のカップルがいた。
女1「もう、びっくりしたじゃん！」
男1「ごめんごめん。夜にやろうって思って、持ってきてたんだよ。湿気ってないかのテストしてみた」
美香「……なんだ。花火か」
智也「ちょっと、君たち！　はしゃぐのはいいけど、他の人に迷惑になるような行為は控えてね」
女1「なに？　このオヤジ？」
智也「……オヤジ。まだ二十八なのに」
美香「あの年代から見たら、二十五以上は十分オヤジですよ」
智也「お前はどっちの味方なんだよ」
男1「他の人って言ってもさー。ここ、無人島じゃね？　人いないっしょ」
女1「あははは。言えてるー」
智也「……バカップル」

美香「今の子は、大体こんなノリですよ」
智也「とにかく、あまり騒がないように。あと、ゴミはちゃんと持って帰るようにね」
男1「はーい。さーせーん」
智也「(怒って)……君、本当に分かったの？」
美香「智っちさん。無駄です。行きましょう」
美香が智也の腕を掴んで、歩き出す。
智也「お、おい、腕を掴むな！　危ないって」
智也と美香が並んで歩く。
智也がピタリと立ち止まる。
智也「あ、ペットボトルだ。……さっきの奴らが捨てたのか？」
美香「違うんじゃないですかね」
智也「なんで、そう思うんだ？」
美香「だって、結構、その辺に色々落ちてますよ、ゴミ」
智也「……本当だ」
美香「きっと、一組の観光客じゃなくって、みんなが少しずつ汚していってるんじゃないですかね」

智也「……」

美香「こういうのって、一度気にし始めると、目が行っちゃいますよね」

智也「……そうだな」

再び、歩き始める智也と美香。

智也「帰ったら、ちゃんと清掃業者の提案をしてみるか。通るかわからないけど」

美香「（クスリと笑う）」

智也「なんだ？」

美香「いやあ、現金だなあって思いまして」

智也「馬鹿にしてるのか？」

美香「いえいえ。褒めたんですよ」

智也「……そうは聞こえなかったぞ」

智也（N）「今まで、ゴミ問題は懸念事項として挙げられているのを見てきた。だけど、実際、自分の目で何度も見ていると、思ったよりも深刻な状況だとわかる。立場が違えば、恐らく俺も、清掃業者を入れない市の対応に不満を爆発させていただろう」

砲台跡付近を歩く、智也と美香。
美香「この辺が砲台跡……ですか」
智也「当時の砲台がそのまま残ってるらしいな。中には爆撃されて壊れたものもあるみたいだぞ」
美香「レンガ造りの壁とか、雰囲気があっていいですね。人気になるのもわかる気がします」
智也「この辺が、アニメの世界観に似てるって話題の所だな」
美香「確かに、ファンタジーチックですね。……ただ」
智也「なんだ？」
美香「ゴミが落ちてると台無しですね」
智也「……だな」
美香「そろそろ、帰ります？　日も暮れてきましたし」
智也「結局、今回も収穫なしか……」
そのとき、どこからか、曲が大音量で流

れてくる。
同時に、歓声があがる。
智也「……今度はなんだ？」
智也と美香が走り出す。

智也（N）「現場についてみると、学生らしき三人の男女が薪を集めて、たき火をしていた。その火はかなりの勢いで燃えている」

男２「ちょっ、まだキャンプファイヤーには早くね？」
男３「いいって。どうせ、すぐ暗くなんだろ」
女２「でもさ、この勢いで燃やしてたら、木とかすぐなくなっちゃうんじゃない？」
男３「木なんて、その辺にたくさんあんだから、大丈夫だって」
智也がズカズカと歩み寄る。
智也「こんな森で火を使うなんて、何考えてるんだ！　すぐに消しなさい！」
男２「何、こいつ？」

男３「うぜえ、お前が消えろ」
智也「火事になったらどうするんだ？　君たち以外にも、観光客はいるんだぞ？」
男３「は？　知らねえし」
智也「……」
男２「何、睨んでんだ？　コラ！」
　そのとき、パシュっという音が聞こえる。
男２「いてぇ！」
　続けて、数回、同じ音が響く。
男３「いてっ！　いてえっ！」
女２「きゃあっ！　なに！？」
　森の中から、迷彩服を着た恭平と田中和樹（２６）、御子柴亮介（２８）が現れる。
恭平「和樹、亮介！　男二人に一斉射撃！　注意した方は撃つなよ！　僕は火を消す！」
和樹「了解！」
亮介「わかった！」
　男二人に向けて、和樹と亮介がガス銃を撃ち続ける。
男３「マジでいてえって！」

男２「すいませんでした！　撃たないで！」
女２「ちょっと、止めてよ！」
和樹「早く立ち去れ！　ここにとどまる限り、撃ち続ける！」
男２「お、おい！　お前ら、行くぞ！」
男２と３、女２が立ち去っていく。
同時に、バケツの水で火を消す恭平。
恭平「ふう。何とか消えたか……」

智也（Ｎ）「手慣れた手つきで、バケツに入った水で火を消したのは、以前、ゴミを片付けていた、ボランティアの青年だった」

智也「……やっぱり、君が有志会の……」
恭平「え？　なんで、あなたたちがここにいるんですか……？」
智也「ちょっと話を聞かせてくれないか？」
恭平「二人とも！　逃げるぞ！　観光協会の奴らだ！」
恭平、亮介、和樹が散らばって逃げる。

智也「くそ！　散らばったか！　星野！　そっちを追え！」
美香「無理です」
智也「即答かよ！　……じゃあ、船着き場で待ってろ！」
美香「はーい」
智也が恭平を追う。
草木の中を走る、恭平と智也。
智也「待ってくれ！　話を聞かせてほしいだけなんだ！」
恭平「悪いですけど、捕まるわけにはいきません」
智也「どうして、あんなことをするんだ？」
恭平「あなたも見ましたよね？　観光客は好き勝手やっていきます。追い払わないと、いつか、この島はゴミの山になってしまう」
智也「……」
恭平「そんなことは絶対に許しません！　僕がこの島を守ります！」
智也「だけど、観光客のおかげで街に活気が

出てきた。それは君もわかってるだろ」

恭平「そんなの一時的なものです！　だから、街は島に頼らずに人を呼べる方法を考えるべきじゃないんですか？」

智也「……確かに正論だ。でも、そんなに簡単にはいかないんだ。だから、この好機を生かすべきなんだよ」

恭平「その為なら、島を汚してもいいって言うんですか！？」

智也「！」

恭介がスピードを上げ、走り去っていく。

智也（N）「咄嗟に言い返すことができなかった。それは俺の中で湧き出していた矛盾そのものだったからだろう。……そんな俺が、信念を持って行動している人間に追い付けるわけがなかった」

友ヶ島の船着き場。

智也がトボトボと歩いて来る。

美香「随分と遅かったですね」
智也「……結局、逃げられた」
美香「まあ、あっちは鍛えてるみたいだですし、仕方ないですよ」
智也「……どうしたんだ？　てっきりなじられるかと思ってたんだけどな」
美香「そんなことしませんよ。元々、捕まえられると思ってなかったですし」
智也「そっちの方が凹むな……」
美香「今は逃げられても、こっちから出向けばいいと思いますよ」
智也「出向く？　出向くって言っても……」
美香「顔が割れたんですから、探す方法はいくらでもありますよ。手配書をばらまいてもいいですし」
智也「いや、手配書ってなぁ……。それに、そもそも作れないだろ手配書なんか。誰かに似顔絵でも描いてもらうのか？」
美香「その必要はありませんよ」
美香がポケットから、スマホを取り出し

て、操作を始める。

美香「再生っと」

再生ボタンを押すと、動画が流れる。

以下、動画の内容。

恭平「和樹、亮介！　男二人に一斉射撃！　注意した方は撃つなよ！　俺は火を消す！」

和樹「了解！」

亮介「わかった！」

男二人に向けて、和樹と亮介がガス銃を撃ち続ける。

ここで、動画の内容が終わり。

智也「……録画してたのか？」

美香「だって、課長、言ってましたよね？　ビデオ回しておけって」

智也「ああ……。そんなこと言ってたな」

智也（N）「次の日、星野が撮った動画を持って警察のところに行ってみたが、被害届が出ていないという理由で追い返されてしまった。被害者のあいつらも、火を使った

ということもあり、届けなかったようだ」

観光協会事務所。

智也と美香が机に向かって、パソコンを操作している。

美香「これでよかったのかもしれませんね」

智也「……警察に追い返されたことか？」

美香「有志会の人たちの気持ち、わかる気がします」

智也「……」

美香「私だって、好きなアニメの聖地がにわか共に穢されたら、同じことしそうです」

智也「……何を言ってるのかわからないが、何となく気持ちはわかった。……けど、個人的な気持ちだけで、他人を傷つけてもいいのか？」

美香「あくまで、ターゲットは穢した人間のみですからね。他の人には手を出しませんよ。有志会の人たちみたいに」

智也「……街の人たちはどうなる？　せっか

く、景気が良くなったのに、変な奴らのせいで、客足が途絶えるんだぞ？」

美香「街のためなら、個人の心情は無視するってことですか？」

智也「いや……そうとまでは言ってないけど」

美香のタイピング音だけが部屋に響く。

智也「……お前は、有志会を捕まえるの、嫌なのか？」

美香「そんなことないですよ」

智也「え？」

美香「だって、あの島に思い入れないですし」

智也「……いい話だったのに、台無しだよ」

和弘が部屋に入って来る。

和弘「お疲れ様ー。……お前ら、昨日、島の方に行ってたんだってな。今度からは行く前に報告してくれよー」

和弘が自席の椅子に座る。

智也「すいません。課長、外出されてたみたですから、事後でいいかなって思いまして」

和弘「ま、メールの一本でもいいから、入れ

ておいてくれ。……で？　進捗、あったんだって？」

智也「え？　あ、はい。一応、有志会メンバーの三人の画像を入手しました」

和弘「それはお手柄だったな。……じゃあ、その画像を使って、調査を開始するのか？」

智也「はい。ただ、さすがに張り紙はできませんので、この写真を元に聞き込みをしようかと思います。たぶん、特定するのはそんなに難しくはないと思います」

和弘「うーん。聞き込みかぁ……」

智也「何か、懸念点があるんですか？」

和弘「確かに、特定は可能だと思う。だが、聞き込みをするってことは、有志会のメンバーが街の人たちにバレるというわけだ」

智也「まあ、そうでしょうね」

和弘「あいつらは、自分の理念でやったことだが、街の人たちにとっては、景気に邪魔をした奴らってことになる」

智也「……」

和弘「この街にはいられなくなるだろうな」
美香「それを覚悟でやってるんじゃないですかね」
和弘「仮にそうだったとしても、それを我々が先導するような形になるのはなぁ。世間体もある。……何とか、現行犯で捕まえて説得というようにできないか？」
智也「星野も言ってますが、有志会のメンバーは強い信念を持ってやってます。恐らく、説得には応じないかと……」
和弘「……しかし、憶測だけで決めてしまうのも、どうかと思うぞ。ここは、一度、説得してみて、駄目だったら警察に届ける、ということでどうだ？」
智也「……課長がそう言うなら」
和弘「すまんな。が、代わりと言っては何だが、私も島に行って指揮を執ることにした」
智也「え？　急にどうしたんですか？」
和弘「……実は少し困ったことになってな」
智也「困ったこと……ですか？」

和弘「イギリスの親善大使が視察に来ることになった」
智也「視察？　どこにですか？」
和弘「友ヶ島に決まってるだろう」
智也「でも、どうして、大使が島なんかに？」
和弘「大使は日本のアニメが好きらしくてな。友ヶ島の噂を聞いて、是非、見てみたいということになったらしい」
美香「親近感が沸く大使ですね」
智也「いや、今はそんな話じゃないから」
和弘「日本としても、イギリスとのパイプ強化は是非とも成し遂げておきたいというのがあるからな。こちらに聞くまでもなく、すぐに日程が決められたようだ」
智也「政治的な案件ってことですか……」
和弘「だから、有志会のことは、何としてでも止めないとならない。下手を打って、大使の心証を悪くすれば、最悪、国からの圧力がかかって、友ヶ島は渡航禁止になる恐れだって出てくる」

智也「……大使が来るのはいつですか？」
和弘「三日後だ」

智也（Ｎ）「事は国の外交に関わる、重大な案件ということで、警察の協力を提案したが、課長に却下されてしまった。市としては、あまり事を大きくしたくないという思惑があるようだ。結局、市の職員数名を借り、総勢、十名ほどで作戦を遂行することになったのだった」

友ヶ島内。
砲台跡地を歩く、智也、和弘、美香。
美香「……（ため息）」
和弘「へえ……。随分と、綺麗になってきてるじゃないか」
智也「そうですか？　結構、ゴミとか落ちてますけど」
和弘「……ゴミ問題はどうしようもないな。まあ、本来であれば、あまり、こういう場

所は観光地にするべきではないんだがな」
美香「……」
智也「課長。観光協会って立場を忘れないでくださいね」
和弘「おっと、そうだった。どうも、身びいきしてしまうな」
智也「この島に、何か思い入れが？」
和弘「うちのじいさんがな、戦争で、ここに派兵されていたんだよ。子供のころによく、話を聞いたもんだ。懐かしいな」
美香「……」
智也「星野。いつまでふてくされてるんだよ」
美香「……一生恨みますので、そのつもりで」
智也「仕方ないだろ。緊急なんだし、人手も足りてないんだから」
美香「私だって、緊急でした。年に二回しかないんですよ、コミケ」
智也「次のに行けばいいだろ」
美香「そういう問題じゃないんです！」
和弘「おいおい。二人とも、喧嘩はそのくら

いにしておけ。そろそろ、作戦に移るぞ」
智也「星野。ちゃんと、把握してるだろうな？」
美香「もちです」
智也「……言ってみろ」
美香「まず、市役所員の人たちが騒ぎを起こして、それを私たちが隠れて見てます」
智也「うん。それで？」
美香「有志会のメンバーが襲ってきたところを、智っちさんが捕まえる」
智也「二人で、だ！」
美香「……か弱い女の子に、そんな物騒なことと、させるんですか？」
智也「そのために、アレを持たせてるんだろ」
美香「そうでした。一度使ってみたいと思ってたので、楽しみです」
和弘「じゃあ、二人とも、常に無線での報告を忘れないようにな」
和弘が行ってしまう。
美香「結局、課長は島には来ましたけど、仕事らしい仕事はしないんですね」

智也「……無線切ってから言え」
美香「切ってないから、言ってるんです」
智也「（ため息）ホント、お前は凄いな」
　そのとき、無線が入る。
和弘の声「二人とも、早く位置につけ！」
智也「……ほら、星野。あっちの木の陰に隠れてろ。居眠りすんなよ」
　智也と美香が別々の方向へ歩いていく。

智也（N）「炎天下の中、一日、待ってみたが有志会のメンバーは現れることはなかった。他のメンバーも、島を監視して回っていたが、どこにも現れなかったと報告された。その日は、星野だけは帰し、俺たちは島でテントを立てて寝ることになった。残り二日。なんとしてでも、有志会のメンバーを捕まえないとならない」
　鈴虫と蛙の鳴く声が響いている。
智也「まさか、現れもしないとは思いません

でした」

和弘「今はお盆シーズンで学生たちが多いのにな。囮の場所はともかく、他の場所にまで一切現れないというのは、おかしいぞ」

智也「……そうですね。最悪、このまま奴らが現れなかった場合、どうなります？」

和弘「それは、本当に最悪のケースだな。まず、私は降格、もしくは他部署へ移動になるだろうな」

智也「自分たちも移動、良くて減俸ですかね」

和弘「……覚悟しておいた方がいいな」

智也「……課長。今回の件、多少は予算を使うことってできますか？」

和弘「もちろんだ。我々の首がかかってるんだからな。多少の無理はするつもりだ」

智也「人を増やしましょう」

和弘「人を、か？　しかしなぁ。これ以上、役所の人員も避けてはもらえんし、何より、明日、募集したところで間に合わんだろう」

智也「大学生です。確か、和歌山大学で、こ

の島の探査部があって夏休みを使って、大規模な調査をするようなことがブログで書いてあった気がします」

和弘「……大学生か」

智也「それに、考えてみたら、市の役員……三十代の男が騒いでいるって時点で怪しいですよね。その点、大学生ならリアリティも出てくると思います」

和弘「なるほどな。いい案かもしれん。それに打てるだけの手は打っておきたいしな」

智也「今から、星野に電話して、明日の朝一で大学にコンタクトを取ってもらいます」

和弘「ああ。そうしてくれ」

智也が携帯を取り出し、電話を掛ける。

智也「あ、星野か？　明日、すぐに動いてもらいたいことがあるんだ……」

昼。セミの声が当たりに響く。

美香「帰った方が大変だったんですけど！」

智也「まあ、そう言うな。で？　どうだ？」

美香「サークル内だけじゃなく、知り合いも呼んでもらえるってことで、三十人近くにはなるみたいです」

智也「よし、上出来だ。作戦はすぐに始めるぞ。昨日、囚役だった市の職員の方は捕まえる側に回ってもらう」

美香「あ、智っちさん、私、今日は別行動しますから」

智也「報告の前に、まずは許可を取れよ。……まあいい。で？　何するつもりだ？」

美香「言えません」

智也「……サボる気じゃないだろうな？」

美香「それなら、最初から島に来てないです」

智也「……わかった。が、無線は持っていけ。何かあったら、すぐに連絡しろ。いいな？」

美香「あ、じゃあ、ついでに市の職員さんたちがどう動いてるか、逐一報告ください」

智也「……俺、上司なんだぞ？」

美香「知ってますよ。じゃあ、お願いします」

美香が颯爽と走り出す。

智也「（ため息）全然、わかってねえだろ」

智也（N）「作戦は花火やキャンプファイヤーなど、とにかく目立つことをして、奴らを待つことになった。星野にそのことを伝えると、引き続き、連絡を入れるように言われた。少々、癪に障ったが、あいつにも何か考えがありそうだったので、言われた通り、状況は伝えることにした」

花火の音が辺りに響く。

そして、それを見て騒ぐ学生たち。

そこに無線が入る。

和弘の声「御門。そっちの状況はどうだ？」

智也「今のところ、異常なしです」

和弘の声「了解だ。引き続き、警戒を頼む。何かあったら、すぐに連絡を入れろよ」

智也「わかりました」

さらに、また無線が入る。

美香の声「智っちさん！　大変です！」

智也「どうした！？　出たのか！？」
美香の声「出ました！　野生のクジャクです！　捕まえますか？」
智也「……いや、いい。放っておけ」
美香の声「了解しました」
　無線が切れる。
智也「……あいつ、何やってるんだよ」
　そこに男子学生がやってくる。
男子学生「御門さん、花火なくなったんですけど、次、どうしましょうか？」
智也「え？　もう？　……そっか。もしかしたら、本部に残ってるかもしれない。持ってきてもらうから、少し休憩してて」
男子学生「わかりました」
　男子学生が歩き去っていく。
智也「……あの子の方が、よっぽど部下らしいよな。っと、連絡連絡」
　智也が無線のスイッチを入れる。
智也「課長、そっちにまだ花火ありますか？」
和弘の声「あるぞ。ひと箱以上、残ってる」

智也「すいませんが、誰かに持ってきて貰えますか？」

和弘「すまん。今、人手が足りなくてな。御門が取りに来てくれないか？」

智也「え？　ここ、離れても大丈夫ですか？」

和弘の声「少しなら、構わんだろ。第三砲台跡の方から、一直線に戻ってきてくれ」

智也「わかりました」

砲台跡地を歩く、智也。

智也（N）「なにか違和感がある。今まではほぼ毎日のように現れていた有志会が、この三日間、現れる気配すらない。……こちらが本腰を入れたタイミングでだ。……もしかしたら」

そこへ和樹と亮介が現れる。

智也「……あ、君たちは有志会の……」

和樹「よし！　亮介、逃げるぞ！」

和樹と亮介が逃げ出す。
二人を追う智也。
走りながら無線を入れる。
智也「課長！　現れました！　すぐに応援を呼んでください。場所は第三砲台跡です！」
智也（N）「現れたのは、以前に見た、和樹と亮介と呼ばれていた二人だった。課長は素早く指揮を取り、二人を囲むように人を配置する。二人を捕まえるが目前に迫った、その瞬間だった……」

智也の無線に連絡が入る。
美香の声「智っちさん。今、どこですか？」
智也「星野か！　今、第五砲台跡だ。すぐにお前も来い！　有志会の奴らが現れた」
美香の声「あ、それ囮です」
智也「は？　囮？」
美香の声「ちょっと、船着き場まで来てください。誰にも連絡しないで、一人で」

ぶつりと無線が切れる。
智也「……なんなんだ？」

船着き場。汽笛が鳴っている。
船からデリック・ブルーム（４７）とそのＳＰが降りてくる。
デリック「（英語で）ここが友ヶ島か！」

その様子を遠くから見ている美香。
そこへ智也がやって来る。
智也「……おい、説明しろ！　囮ってなんだ？」
美香「あれ、見てください」
智也「ん？　外人か？　それがなんだ？」
美香「イギリスの親善大使ですよ。あの人」
智也「は？　そんなわけないだろ。だって、来るの、明後日のはずだぞ！」
美香「そんなこと言われても、来ちゃった事実は変えられませんよ」
智也「……どういうことなんだ？」
美香「二パターン考えられます。大使が嘘つ

いて早く来たか、こっちに来た情報が間違えてたかですね」

智也「どっちもあり得なさそうだけどな」

美香「あっ！　動き出しましたよ」

智也（Ｎ）「親善大使は周りにいる、体格の良い黒服の男……おそらくはＳＰの人たちに待機するように命じて、先へと進む。そして、その先には……迷彩服を着た、見覚えのある青年がいて、その青年と握手をする。それは、最初に会った、ボランティアと名乗った、あの青年だった」

美香「様子を見る限り、あの、有志会メンバーと待ち合わせをしていたようですね」

智也「馬鹿な！　そんなこと、あり得ない！」

美香「いやいや。現実を見てください。ほら、仲良く歩いていきますよ」

智也「……」

美香「まあ、前向きに考えましょうよ。これ

で、今、何が起こってるか、わかったわけ
ですし」
智也「……ああ。そうだな」

デリックと恭平が道を歩いている。
突如、恭平が立ち止まる。
デリック「（英語で）どうしたんですか？」
デリックにガス銃を向ける恭平。
デリック「（英語で）なんのつもりだい？」
恭平「悪いですが、一緒に来てもらいます」
デリック「（英語で）まいったな。通訳は連れ
てくればよかった」
そこへ智也と美香が現れる。
美香「（英語で）心配ないですよ。アトラクシ
ョンです」
智也「……お前、英語、話せたんだな」
美香「ええ。まあ、一応」
恭平「どうして、あなたたちがここに？」
智也「打ち合わせと違う。……だろ？」
恭平「……」

智也「君たちは、ずっと内部の情報を得ていたんだろ。もう、全部わかってる。諦めて投降してくれ」

恭平「それはできません。何としてでも、大使を誘拐し、国際問題にしないといけないんです」

智也「そんなことをすれば、重罪だぞ」

恭平「それでも、この島を守ることができるなら、本望です」

智也「他に島を守る方法はあるはずだ。……一緒に考えよう」

恭平「僕はおじいちゃんに、この島を守るように託されたんです。これ以上、この島が汚れていくのには耐えられません」

智也「君のおじいさんも、ここに派兵されたのか……？」

恭平「そこをどいてください。大使を撃ちますよ。ガス銃とはいえ、威力は高いです。大使を怒らせる程度には、ですがね」

デリック「（英語で）君、すまないが通訳して

くれないか？　一体、何を話してるだ？」
美香がデリックに近づく。
美香「（英語で）いやあ、暑いですね」
恭平「聞こえなかったんですか？　近づかないでください」
美香「（英語で）顔色悪いですよ。熱中症じゃないですかね？」
デリック「（英語で）そうか……？」
そのとき、美香がスタンガンを取り出し、デリックに当てる。
デリック「うっ！」
デリックが倒れる。
恭平「え？」
智也「悪いな。終わりだ」
スタンガンを出して、恭平に当てる智也。
恭平「ううっ！」
恭平が倒れる。
智也（N）「近づいてしまえば、銃よりもスタンガンの方が有利と提案したのも、星野だ。

とにかく、こうして、有志会による事件は一応の解決をみたのだった」

観光協会の事務所。

智也がパソコンを打っている。

そこに和弘が入って来る。

和弘「三人とも、罪を認めたよ」

智也「（手を止めて）あの件は……？」

和弘「大使はあのときのことをよく覚えてないそうだ。星野くんが言った、熱中症だったことを鵜呑みにしてくれている」

智也「そうですか。それなら、有志会はそれほど重い罪にはならなそうですね」

和弘「ま、不幸中の幸い、ってところだな」

智也「残念ですか？　大事にならなくて」

和弘「……どういうことだ？」

智也「課長ですよね？　有志会に情報を流していたのは」

和弘「……」

智也「タイミングが良すぎましたよ。本格的

な調査が始まった途端、有志会の活動がピタリと止みましたからね。あと問い合わせたところ、大使の来日の日時、正確に課長に知らせたと、県庁から返答が来ました」

和弘「……そうか」

智也「警察や県庁、市議からの応援を断ったのも、課長だったんですね？」

和弘「……そこまで気づいていたか」

智也「有志会が出していた、募集のサイト。あれ、最初に立ち上げたのは課長ですよね。星野が突き止めてくれました」

和弘「（ため息）何が、星野君は足を引っ張るだけだ。優秀な部下じゃないか」

智也「……動機は有志会と同じですね？」

和弘「私はね、今まで色々な観光地を見てきた。その成れの果てもな。だから、どうしても、あの島がそうなるのは耐えられなかったんだ」

智也「だから、島で問題を起こして、封鎖させたかった……」

和弘「御門。この世界には、無暗に人が入ってはいけない場所というものがあるんだ」

智也（N）「この後、課長は自首し、有志会のメンバーを騙していたと供述した。そのことにより、有志会のメンバーは釈放された」

加太港の船着き場。

智也「ボランティアの皆さん、今日はお集まりいただき、ありがとうございました。それでは、これから友ヶ島に向かいます」

智也（N）「あの後、俺はボランティア団体に入った。星野には、現金だと笑われたが。……課長はこの世界には人が入ってはいけない場所があると言っていた。でも、その場所を守ることができるのも人だ。こんなのは、ただの自己満足かもしれない。それでも、前に進むことが大切なんだと思う」

終わり